

障害児の親にエール

「他で味わえない幸せ きっとある」

知的障害者支援施設を運営する久喜市吉羽のNPO法人「あかり」代表理事の川岸恵子さん(55)が先月出版した『障がいをもつ子の育て方』がよくわかる本(現代書林)が話題になっている。つづいたのは、10年前に亡くなった長男ら障害を持つ300人以上の子どもと、母親のこと。5年前に法人を設立して以来、親の苦悩や絶望と向き合ってきた川岸さんには、繰り返し伝えたいメッセージがあるという。「障害があっても決して不幸ではない。他では味わえない幸せがきっとあるから」

命に対する深い信頼に貫 選んで誕生してきた子の偉
かれた本だ。「障害の特徴 大きさに敬意を」。障害児を
を知り、一番の応援者にな 対等な存在として理解、尊
って」「どんなに重い障害 重しようとして訴えかけなが
があっても、生きることを ら、支援した子どもたちの



出版した本を手にする川岸さん(久喜市の事務所で)

NPO法人代表 体験1冊に

事例を基に、対処法や、就学、就業、自立に向けたアドバイスなどが示されている。

子どもの将来を悲観し、ほとんどの親が一度は「一緒に死のう」などと考えるという。川岸さんは、ある母親から「自分では死にきれない。すれ違つたらツクが突っ込んできてくれたらどんなに楽か」と告白されたことが忘れられない。

著書には、施設を卒園した子どもの母親がつづった手紙が紹介されている。「この子には未来がない」と悲観し、共に逝くことも考えました」「T(子どもの名前)と私は別の人格であり、TにはTの世界があることを教えられました。私も私自身の人生があると、いうことに気づかされました」

川岸さんは、難病の三角頭蓋で重度の知的障害を持った長男千晃さんを育て

た。漠然と「一緒に死んだら楽になれる」と思ったこともあったが、千晃さんの笑顔を見ていると、苦しくても前向きになった。「子どもは所有物じゃなく、親とは別の人生を歩む人間だ」と思えた。千晃さんは2001年、病気のため23歳で亡くなった。川岸さんはその後、障害児を持つ母親たちと支援団体を設立、支援の輪を広げる活動を続けた。

「会話がスムーズにできなかった」「我慢できるようになった」「手のサインで意思を伝えられた」……。子どもも成長に感動する母親たちの様子も本に盛り込む。「障害なんて、命の重さから考えればささいなこと。生きている素晴らしさを実感してほしい」。川岸さんのエールだ。

四六判、208ページ。1200円(税抜き)。全国の書店で販売されている。川岸さんは、全国の保健所や特別支援学校、児童ライサードビスセンターなどに約4000部を寄贈した。

問い合わせは、あかり(☎0480・24・2060)へ。